

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270102637		
法人名	株式会社アイ・エル・エス		
事業所名	グループホームありすの家		
所在地	長崎県長崎市椎の木町25番19号		
自己評価作成日	令和元年7月16日	評価結果市町村受理日	令和元年10月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ローカルネット日本評価支援機構
所在地	長崎県島原市南柏野町3118-1
訪問調査日	令和元年8月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

住み慣れた地域で安心して暮らす事ができるという理念のもと、入居者様の殆どがホーム界隈の地域に住んでおられました。窓から見える景色が懐かしく安心に繋がっています。非常災害時に備えて、1Fには介護度の高い方、歩行に不安のある方等重度化した様子ではありますが、もう一つの理念、可能性を信じゆっくり待ちますという言葉の通り、時間が経っても本人ができることは本人ができるまで見守り、できない事は次への期待を膨らませ、笑顔で職員がサポートしていきます。急がず、焦らず、ゆっくりと、家で家族と過ごしているような穏やかに過ごせるホームです。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

高台に位置する当ホームの窓からは、見晴らしが良く開放的な風景を臨むことができる。ホームでは全体として過ごす時間と入居者が思いおもいに過ごす時間を設けており、ホームフロアのテーブルでは入居者がレクリエーションを楽しみながらも真剣に取り組んでいる様子が見受けられる。また、一人でいることに不安を感じる入居者については職員と一緒にフロアで寛いだり、居室ソファにてテレビを観て楽しんだりベッドで横になり身体を休めたりするほか、入居者同士が互いの居室を行き来して世間話をするなど、個々の生活パターンを大切に支援がなされている。ホームでは入居者がゆっくりと食事ができるように職員の一方的な誘導や都合で動くことはせず、個人のリズムを大切に支援に日々努めている。ホームは地域との繋がりを年々深めて互助関係構築に努めており、今後も地域に開かれた明るいホームづくりに期待が持てるホームと言える。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット名 グループホームありすの家

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「住み慣れた地域で安心して暮らす事ができるよう支援します」「可能性を信じゆっくり待ちます」という二つの理念を掲げている。入居者ができるまで急がずゆっくりと待っています。	ホームでは平成14年立ち上げの際から掲げている「住み慣れた場所に住む」という意味を含めた理念をもとに、近隣住民との馴染みの関係づくりに努めている。最近ではホーム近隣に住んでいた方の入居が増えてきている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域住民の一員として、自治会に加入している。民生委員を通じて地域住民の方々の訪問も増えている。畑の野菜や枇杷をいただいたり、気軽に声をかけてくださっている。	民生委員の働き掛けによってホームへの地域からの見学者や地域住民の訪問などが増えているほか、バスで通勤する職員は同じバスに乗る住民と会話することで顔馴染みの関係を築いている。ホーム自体が地域の中に溶け込んでおり、日頃の努力の成果が窺われる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の中で、地域の方々から認知症の事例を基に質問を受けている。また、民生委員がホームの活動を地域のサロンに取り入れてくださっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に一度行われる会議の中で、入居者の現状やホームの取り組み等をわかりやすく説明し、質疑応答の中で様々な意見やアドバイス等があり、サービスに反映している。	運営推進会議には民生委員や地域包括支援センター職員の参加があり、ホームの報告に留まらず有意義な意見交換を行っている。会議では入居者の日常を収めたDVDを鑑賞することもあり、さらなるホーム取り組みの理解に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	推進会議に地域包括支援センターの職員の参加があり、入居者のホームでの生活を見てもらいながら、入居の相談を受けることもある。また、入居後に生活保護の手続きを行うこともあり、福祉課の担当の方とも普段から関わりを持っている。	ホームは民生委員や地域包括支援センター職員と互いに相談したり相談を受けたりするなど良好な関係性を築いており、生活保護の手続き等に関しては市の福祉課職員と関わりを持っている。地域サロンのレクリエーションについて民生委員よりアイデアを求められるなど、スムーズな連携が取れている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は行わない事を原則に介護にあたっている。玄関の施錠においては、不審者等の侵入や防犯上の問題がある為、通常から開錠していない。	ホームでは身体拘束をしないことを当たり前のことと認識し、身体拘束委員会を中心に外部研修で学んだことはホームに持ち帰り、全職員対象の内部研修にて拘束についての理解を深めている。拘束に該当する恐れのある入居者については回避できる方法を職員間で検討し、身体拘束ゼロの支援に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関する研修をおこない、高齢者虐待防止法についての理解を図っている。言葉の虐待についてはホームに掲示することで、普段から自分自身や周りが気づくようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している入居者が数名おり、実際に活用していることにより身近に感じ理解に繋がっている。また、後見人と接する中で学ぶことがたくさんある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には重要事項説明書、契約書、金銭管理や個人情報保護について説明し、理解、納得した上で同意を得ている。疑問や不安事にはその都度答え、解決している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者や入居者家族から意見や要望があった場合は、早急に施設全体で話し合い、解決、改善し運営の向上に繋げている。入居者一人ひとりに担当の職員がおり、話しやすい関係づくりを心掛けている。	職員は入居者の日頃の発言や表情などから要望を汲み取っている。また、面会に訪れた家族から意見が出た場合には早急な改善に努めている。意見の表出がない家族には入居者の支援内容についての打診や日頃の様子を報告しながらその中で意見が出せるよう工夫している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者や管理者は常に現場を見守り、意見や提案が言いやすい関係づくりをしている。働く職員の気持ちを第一に、働きやすい職場を常に目指している。	ホームでは日頃から代表、施設長、管理者も職員と同じ目線での入居者支援に携わっており、職員は管理者に何時でも気軽に相談することができる。管理者は職員それぞれの力を活かせるよう職員の役割を明確にするとともに、職員は自分の役割を果たすことでやりがいを持って入居者への日頃の支援に繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者や管理者は職員と一緒に現場に入り、直接介護に携わりながら個々の勤務状況の把握に努めている。職員の得意、不得意を理解し、得意分野を活かして仕事にやる気を持てるように導いている。また、休憩時間を長めに設け、リフレッシュしてもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の能力に応じて、知識や技術が習得できるようにしている。新人の職員に対しては役職に関わらず、先輩職員が指導する機会を作り、中堅職員の成長に繋げている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議に出席させていただき、多職種の同業者と交流を持つ機会がある。また、入所相談や入所時の面談等で他施設を訪問することが多く、その際に関係づくりができていく。		

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に必ず本人との面談を行い、本人の現状を十分把握したうえで本人の思いを聞き、環境の変化に伴う不安を解消できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みの相談やホームを見学に来られた際に、困っている事や不安に思っている事、家族が思う本人の望む生活を聞き、入居後は状況報告のため密に連絡を取り、信頼関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に本人や家族から情報収集を行い、本人に必要な支援は何かを一緒に考えている。場合によっては、他サービスが必要なケースもあり、居宅介護支援事業者や地域包括支援センターに繋いでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒にできる事も限られている中、ありがたい言葉、手を合わせて伝える感謝の気持ちをいただけることが職員の励みになっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とは常に良好な関係が築けるように努めている。面会に来られた際には、普段の様子を伝え安心してもらっている。また、なかなか面会に来られない家族にもホームだより等を通じ、生活がわかるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人・知人の面会は本人及び家族に確認した上で実現している。	ホームでは家族対応にて2週間に1回日曜日に教会の礼拝に出向いたり法事や墓参りに外出したりするほか、以前からの知人が訪れることもある。職員は病院受診の際に入居者が以前生活していた家の前を通るなどできる範囲での支援に努めており、希望があれば応じる意向にある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を十分把握し、食堂の席等の配慮を行っている。おしゃべりが好きな人同士が近くの席に座り、話がいつまでも続いたり、他入居者の		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も退所先に出向いたり、必要な情報提供を行っている。家族の支援が行えない入居者には、退所後も必要な対応を最後まで行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いを上手く伝えることができない入居者が殆どなので、日々の関わりを大切に、本人をよく知り思いの実現に繋げている。	ホームでは職員から改めて希望を聞いても答えることが難しい方が多いため、職員は日々の生活の中で入居者が発する言葉や表情から汲み取るよう努めている。把握した思いは記録し、職員間で共有するとともにケアプラン作成に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に行う本人や家族の聞き取りだけでは把握できないので、入居後も普段の会話の中から聞き取ったり、本人でわからない部分は家族の訪問時に話を聞いて情報の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活の中での入居者の行動や発言の気付きを記録にとどめている。記録や職員の伝達の中から状況を把握し、随時ミーティングを開いて情報を収集している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者も入居者家族も望む暮らしはなかなか難しく答えに困っている。日頃から本人や家族の思いを聞きながら、本人にとってより良い暮らしができる課題を発見している。	ホームでは入居者の思いや意向を日頃の生活から把握し、家族面会時や遠方の家族からは電話で聞き取った内容をプランに反映している。意向を上手く伝えられない家族には日頃の様子を詳しく伝え、返ってくる言葉などから意見や思いを把握するよう努めている。入居者の担当職員がモニタリングやアセスメントなどの記録を行い、それをもとにケアプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に日々の様子や普段と違うような変化があった時の様子を記入している。申し送りノート等を活用して職員間で伝達しながら状況を整理し、介護計画の見直しに反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者や入居者家族の状況の変化に応じて、ベストなサービスが選択できるよう、一緒に考え、ホームとしてできる事は協力している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターや地域の民生委員に地域の情報をいただきながら、地域の方々と協力し、安心した暮らしができています。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ホームのかかりつけ医により、定期的な往診、緊急時は24時間対応していただいている。入所前からの医療を希望される方は基本的に家族対応をお願いしている。場合によっては職員が通院支援をしている。	ホームでは入居時に以前からのかかりつけ医への受診を継続するのかホーム協力医に変更するのか選択が自由であることを伝えている。その上で緊急時の対応などホーム協力医に変更することのメリットを予め伝えている。協力医が緊急時や看取りの際の対応に協力的であるため、入居者・家族の安心に繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週2回の主治医の往診時には、看護師も同行しているため、常に状況の伝達ができおり、相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は受け入れ先医療機関に必要な情報提供を行うとともに、家族、病院関係者と密に連絡を取り合いながら早期退院が実現できるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医の判断により、医療処置及び医療行為が必要になった場合、または入院が長期化する場合は退所となることを入所前に説明し、理解していただいた上で契約している。食事を経口摂取できる間は重度化していてもホームで支援している。	看取りの方針についてホームでは入居時に本人や家族に説明している。主治医による看取り時期の判断後、経口摂取が可能な限りはホームで支援していく方針にある。医療的措置が必要となった場合には主治医から家族へ説明し、家族承諾のもと施設や病院への移行など最期まで他機関と連携した支援ができるよう努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時の対応についてマニュアル化し、職員に周知徹底している。緊急時の対応については、かかりつけ医と相談し決めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている	職員全員が入居者と一緒に実践に即した避難訓練を繰り返し行っている。定期的に水消火器を使用した消火訓練、消防への通報訓練も行っている。地元消防団へ協力を依頼し、避難訓練を実施。訓練の状況から指導やアドバイスをいただき、また専門的な知識も習得できた。建物の構造等も確認していただくことができた。	ホームでは毎月様々な出火場所を想定した夜間想定避難訓練を実施している。管理者らは以前から地元消防団への訓練協力を依頼していたが、本年7月に一緒に訓練を行い、今後も協力体制継続に努めていく意向にある。昨年6月には大雨による土砂災害を想定した訓練を実施し、今年7月に土砂災害に関する避難確保計画を策定した。	入居者情報の一覧表の保管場所に関して職員への周知に課題が窺われる。例えば備蓄倉庫に保管するなど、全職員で情報が共有できるよう今後の取り組みに期待したい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人ひとりに応じた接し方、言葉の遣い方をしている。当たり前にならないよう、入居者の人格を損ねる言葉遣いになっていないかを職員同士で確認し、接遇の向上に努めている。	職員は日々の観察の中で入居者が好むことや嫌と感ずることを把握し、人格の尊重を念頭に置いた支援に努めている。また、女性が最後まで羞恥心を持っていることや、言葉遣いについてもフロアに注意喚起を掲示し、それぞれの言葉遣いが適切か否かを常に振り返ることができるよう取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段から本人の思いの把握に努め、本人の希望を叶えている。職員の思いで決めるのではなく、必ず本人に意思の確認をし、物事を行うようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の過ごし方を自分で決めることのできる方は少なく、職員の誘いによるものになっているが、どう過ごしたいのか本人の気持ちを考慮した対応をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みを伝えられる方とは一緒に洋服選びをしている。伝えられない方は職員が本人の今の様子から寒がりの人には羽織を着てもらったり、洋服の袖の長さをどうするか等、気持ちを汲んだ支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者の好きなもの、嫌いなものを把握し、食事の提供の際には配慮している。食事の準備を手伝ってもらったり、食後は食器を職員と一緒に洗ったり、食器拭きやお盆拭き等、それぞれが役割を持って行っている。	職員は入居者の嗜好などについて把握しており、食事形態がキザミ食の方にもまずは他の方と同じものを提供し、口に運ぶ際に本人に応じた大きさにスプーンなどで切り分けることで同じものを食していると実感できるよう工夫している。食事の際、入居者からは『おいしい』との声が聞かれ、食事が楽しいひと時となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの嚥下状態に合わせた工夫をし、食事を提供している。食べる楽しみ、喜びをいつまでも持ってもらおうよう、入居者のできる力を見守りながら支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、利用者の状態に応じた口腔ケアを行っている。食後に横になることもあるので、不顕性誤嚥による肺炎等の予防のため、口腔内の清潔に努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を通して入居者一人ひとりの排泄パターンを把握した支援を行っている。尿意、便意がわからずオムツ対応の方もできるだけトイレでの排便ができるように努めている。	職員は入居者一人ひとりの排泄パターンを把握しトイレで排泄できるよう取り組んでおり、夜間帯もポータブルトイレを使用する方はいない。職員からの排泄の声掛けにも拒否なくスムーズにトイレ誘導できており、日頃の関わり合いの中で入居者が信頼感を自然と持てるような関係性がスムーズな排泄支援に繋がっていることが窺える。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	自然排便に繋がるよう、食事内容や水分摂取量の工夫をしている。また、排便の有無を確実に記録し、便秘からの食欲不振を招かないようにしている。本人の身体状況に応じて自然排便が困難な場合は、主治医と相談し、薬で調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	安全に安心して入浴ができる支援を大切にしている。高齢の入居者も多いので、夏場などは特に入浴後に負担がかからないよう、丁寧に手早く、入浴介助を行っている。	ホームでは入浴日を設定しているが、体調不良や拒否があった場合には代替日を設けて入浴できるよう支援している。職員は入居者の好みに合わせて湯温を調節するなど、一人ひとりの思いに沿った入浴の時間を楽しめる工夫を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者一人一人の生活リズムや体調を見ながら個別に休息を取ってもらうようにしている。日中座りっぱなしにならないよう、午前中の活動が終わり、昼食後は必ず横になり、足を伸ばしてもらうようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員が薬の目的や副作用、用法、用量を把握している。入居者の状態の変化があればすぐに主治医に連絡し、調整をお願いしている。誤薬防止のため、職員が必ず服薬確認を行い、チェックしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者それぞれの経験や得意分野を発揮できる場面を作り、本人の自信に繋げている。できることは減ってきているが、もやしの根切りや新聞置みなど、できることを続けている。針仕事ができる方には洋服やズボンの直しを普段からお願いしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	年に2回、敬老会とクリスマスにはお元気な方も車椅子の方も全員で外出をしている。また、入所から散髪は決まった所に行っている方がおり、本人の気持ちを尊重し、家族と協力しながら、車椅子になった今も外出支援を実現している。	年2回敬老会とクリスマスの際にホーム全体で外出し、ドライブや外での食事、職員による出し物披露など入居者全員が楽しめるよう外出支援に取り組んでいる。家族とともに外出する入居者もあり、その際には家族へ介助方法の助言など支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っていると安心という方は2名くらいおられる。小銭程度ではあるが、枕元において安心に繋がっている。現在の入居者の状態からはお金を使えるような場面はない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙等は本人の希望に応じて支援している。事前に家族に電話可能な時間を確認し、家族の負担への配慮もしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内は落ち着いた色合いで統一している。フロア内に必ず季節の物を取り入れ、温度や湿度にも気を配っている。各居室、トイレ等、換気をこまめに行い、においの面でも気配りをしている。	ホームフロアで過ごしたい方は職員との会話などで楽しく過ごし、居室で過ごしたい方はソファでテレビを観たりベッドで横になったりするなど、その方らしい生活ができるよう支援している。職員は掃除ができる入居者とともに拭き掃除を行うなど、共用空間や居室の清潔保持に努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	階段の踊り場にソファを設置している。周りから見えないようになっているので、一人で静かに過ごしたい時でもゆっくりできるスペースになっている。また、リビングにはソファが2台あり、思い思いに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人のお気に入りのもの、使い慣れたものなどを持ち込んでいただき、入居後も変わらぬ生活環境で寛ぐことのできる部屋づくりをしている。入居時には、できるだけ家族に本人の好む部屋づくりを協力いただいている。	入居時に以前から使い慣れた物の持ち込み等について入居者や家族に説明し、居室で過ごす際に自宅と同じように過ごせるようテレビとソファなどを準備してもらいたい旨を家族に依頼している。室内にソファがあることで入居者同士が居室を行き来し、自宅での生活と同様にご近所付き合いができています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者一人ひとりの生活の様子をよく観察して、「できるよう」「わかるよう」に工夫している。身体の状態から居室の移動があり、部屋の場所を混乱し絵しまうことがあり、本人の目印をつけて自分で部屋が見つけられるようにしている。		